

8月30日「霊に従う生き方」ヨハネ8章8:3～11

イエスの活躍を苦々しく思っている人たちがいました。律法学者やファリサイ派の人たちです。彼らは、どうにかしてイエスの弱点を掴んで失脚させてやろうと狙っていたのです。そんなある日、彼らにチャンスが訪れました。姦通の罪を犯した女性を現行犯で捕らえたのです。彼らは急いで、イエスが居る神殿に向かいました。ちょうど、イエスは教えを説いている途中で、周囲には人だかりが出来ていました。大チャンスです！ここでイエスを陥れることが出来れば、イエスの人気はガタ落ちです。彼らは、捕らえてきた女性を真ん中に立たせて、問いました。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」彼らは勝った！と思ったでしょう。“YES” “NO” どちらに答えてもイエスは窮地に立たされるのです。

もしイエスが「律法に書かれている通り石で撃ち殺すように」と言えば、彼が普段から説いている「赦しなさい」という教えは嘘になります。民衆は思うでしょう。「な～んだ、この人は表面ばかり優しくって内面は冷酷な人なんだ」と。逆に「石で打ってはならない」と言えば、イエスはモーセの律法を軽視し、社会的な秩序を守る意思がないと思われ、民衆から反感を買ったことでしょう。

しかし、イエスは彼らが思ったように YES、NO では答えられませんでした。イエスは彼らの問いには何の関心も示さずに、無視して地面に何か書き始められたのです。勝ち誇った気でいた律法学者やファリサイ派たちは、むきになって何度もイエスに問いました。そこで、ついにイエスは答えられました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」これを聞いた人々は一人、また一人とその場を立ち去り、その場にはイエスと女性だけになってしまいました。イエスに女性は言いました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

今日の物語は色々な意味で示唆に富んでいると思います。一つは私たち

は人間ですから神の前に罪のない者などいないということです。パウロの言葉です。「正しい者はいない。一人もいない（ローマ 3:10）」コロナ禍の中を歩む私たちの現実に直結しているように感じます。「自粛警察」という言葉が現れました。コロナへの対策という大義名分を得て、感染者や感染予防を怠った者へあまりに過度な攻撃がなされると言います。岩手県で県内初の感染者が出た銀行のガラスに石が投げ込まれて割られたり、三豊で感染者が出た園には 1 週間嫌がらせの電話が鳴りやまなかったらしい。誰しもが感染の可能性もあり、感染は本人には防ぎようのないことにも関わらずですよ。本当に何か狂っていると思わされます。皆、程度は違いますが、同じような不安、同じようなリスクの中で暮らしているのですから、裁きあいではない形での歩みが出来ないものかと思います。

もう一つ、正義は暴走していくということです。先週紹介した『イエローでホワイトで時々ブルー』と言う本に、中学生の息子が、暴力的ないじめの現場に出くわす話がある。いじめの原因は、いじめられていた貧しい家庭の移民の子どもが万引きしている場面を同級生たちが発見して咎めたことだった。最初のうちは「あんなことをしてはいけないよ」と諭していた同級生たちは次第にエスカレートして、「犯罪者」と見下し始め、最後には「貧乏人」「社会の屑」と集団で暴力を振るうようになったのだとか。ここにはイギリス特有の階級社会も関係しているようで、貧しい家庭の出身の子たちで、家で満足に食べることが出来ない子どもたちの中には食べるに困って学食で万引きして飢えをしのぐことは時々あるらしいのです。著者は息子にこう教えます。「自分たちが正しいと集団で思い込むと、人間はクレイジーになるからね。」息子の答えです。「盗むことは良くないけど、あんな風に勝手に人を有罪と決めて誰かをいじめるのは最低だと思う」

実は今日のヨハネ福音書のなかで本来の律法の規定通りならば登場しなければならぬはずの人が出てきていません。誰か？相手の男性です。本来の律法では（申命記 22:22）、姦通の現場を取り押さえられた場合、男と女の両方が石打ちにされなければならないとありますが、この場に引き出されて罪を問われているのは女性のみなのです。なぜなのでしょう。多

分女性の方が立場が弱いからでしょう「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。(マタイ7:1)」イエスの言葉です。よくよく考えてみると私たちが誰かを「裁く」のは自分と同等か、弱い相手に対してです。強い相手には「批判する」とか、「抵抗する」とかですよ。イエスは弱い者へと向けられる暴力的な裁きを批判したのかもしれませんが。

「正義が造り出すものは平和。正義が生み出すものはとこしえに至る静けさと信頼である。イザヤ書32章17 聖書協会訳」正義を求めることは本当に大切です。世の不正や、不条理に憤ることは大切です。でも正義は時に暴走します。正義という大義名分をまとった集団は本当に冷酷で恐ろしいことが行えます。魔女狩り、十字軍、近代の戦争に至るまで、特にキリスト教が少数派ではなく、多数派となり、大きな力を持つ社会において、教会が誤った正義の暴走を繰り返してきたことは私たちは知っています。では、どう生きるのか？パウロの言葉です。「しかし今は、わたしたちは、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです。」(ローマ7:6) 文字に従う古い生き方から霊に従う新しい生き方へと変えられなければならないのです。

パウロは、今日の物語でイエスを陥れようとするファリサイ派の一人でした。彼は熱心に律法を読み込み、それに従って正しく清い生き方をしようとしていたはずですが、けれども彼はどうしてもその生き方では救いにたどり着くことが出来なかったのです。「文字は殺し、霊は生かす(2コリ3:6)」と言われるように文字で表された律法は確かに正しい生き方を示してはいるが、文字は私たちの罪を明らかにするばかりで、そこには救いはないのです。「罪を犯したことの無い者から先に石を投げなさい」と言われて誰も投げられなかった状況がそれを物語っています。そうではない、イエス・キリストの十字架による救いを受け取る道をパウロは説くのです。「ローマ3:23~24人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」私たちに文字(律法)ではない、新しく従う「霊」

が与えられています。裁きではなく愛に生きることが出来ます。私たちは今一度、赦し合い、愛し合う道を探ることが求められています。この物語を通して、新しい生き方へと招かれているのです。